

中島岳志

イシューを掘り起こす

私は浅野詠子さんの「重装備病棟の矛盾（7年目の司法精神医療）」に高得点を付けました。

近年の日本社会は「カーニバル化」しており、問題が起ると瞬間的に断片的な熱狂は起きるもの、その追求が持続しません。そのため重要な問題があつという間に忘却され、当事者が放置されることになります。本来は、視聴者・読者の多い大手メディアがこう

いった問題を丁寧に追い続けるべきですが、日々のニュースを追うことに埋没し、なかなか取材の時間や表現のスペースを確保できないのが現状でしょう。

そんな時、インディペンデントなルポルタージュが重要な意味を持ちます。みんなが忘れているイシューを掘り起こし、問題の構造を明らかにして議論を喚起する。誰も耳を傾けようとしない声を拾い、多くの人に届ける。そのような役割がルポにはあります。

浅野さんの作品は、私たちが忘れていた「重装備病棟」の問題を明らかにし、当事者の声を丁寧に掘り起こした労作です。私も小泉政権下で「医療觀察法」が採決された時には注目しましたが、次第に他の問題に追いやられ、関心を持続させることができていませんでした。新たなラベリングを作り、問題を病棟の中に隠蔽する強制入院制度は、私たちが生きる社会の反映なのでしょう。浅野さんは、問題の上流から下流まで、さまざまな当事者を取材し、問題の核心に迫ります。

法案採決時には強硬に反対した民主党も、今や専用病棟の増加を進めています。結局のところ、われわれの無関心が強制医療という権力の推進力となっているのでしょうか。このような現実を再提起した本作品は多くの人々に読まれる価値があると思います。

是非、一冊の本にまとめていただきたいと思います。